

科学コミュニケーションイベントの実践と評価

—子育てに役立つ学術情報の発信—

情報科学ゼミナール 1314048 比嘉一誠

1. 研究動機・研究目的

現在、コーディネーショントレーニングが子育てにおいて注目され始めているが、それに関する知識がある親は多くはない。そこで今回は科学コミュニケーションのガイドラインに従い、イベントをコーディネーショントレーニングの学術情報を発信しようと考えた。

本研究の目的は、科学コミュニケーションのガイドラインに従って子育てに役立つ学術情報を発信するための科学コミュニケーションイベントを開催し、パフォーマンスの効果評価を行うことである。

2. 研究方法

本研究は科学コミュニケーションのガイドラインに従い、Visual、Aural、Read/write、Kinaesthetic の4点を満たすイベントを企画し、実践した。イベントの参加者は子育て中の母親16名と子20名である。アンケートは科学コミュニケーションの評価指標であるGLOsに基づく質問票項目を作成し、イベント後、参加者に回答を求めた。その回答をもとに分析し、ガイドラインの効果を明らかにする。また、環境との関連性を確かめるために2日間に分け、場所を変えて行った。

3. 主な結果と考察

今回のイベントを通してアンケート結果から、学術情報の理解が深まったことが明らかになったことで、科学コミュニケーションのガイドラインにしたがってイベントを行えば、それについて情報がない人でも、より伝わることを確認できた。ガイドラインにしたがってイベントを行ってもVisual、Aural、Read/Write、Kinaestheticの4項目を満たしていなければ、パフォーマンスのレベルが低くなり、参加者の理解度も低くなり、参加者の満足度も落ちる。逆に満たしていれば参加者の理解度がより高まることが期待できる。イベントを行う上では参加者同士に議論を行わせたり、実際に体験、体を動かすことによってより理解度が増し、イベント自体にも一体感が生まれ、参加者の集中力を保たせることが出来るのだろうという印象をうけた。今回のイベントでは重視しなかったが、イベントを行う環境によって参加者の満足度も左右されるという印象をうけた。プログラムは同じであっても、環境が異なれば感じ方が変わるので、その環境にあったイベントを行うことが大切である。

4. 結論

ガイドラインしたがって Visual、Aural、Read/write、Kinaesthetic の4点を満たすことができれば、パフォーマンスのレベルも高くなり、参加者の満足度も高くなる。やることは同じでも環境によって感じ方が異なるので、その環境にあったパフォーマンスが必要である。科学コミュニケーションは科学についてだけでなく、その他の学術情報を伝えるということにおいて有効的である。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を通して科学コミュニケーションについての知識を得ることができ、そしてこの方法は有効的であるということが明らかになった。科学コミュニケーションを駆使してイベントを行うことは、それなりの準備も必要であり大変ではあったが、情報がうまく相手に伝わり、何よりそのイベント自体が充実したものになった。私自身最初は科学コミュニケーションというものがあまりよく分かっておらず、それを理解するところから始め、イベントを行ったが、科学コミュニケーションを知れば知るほどより奥深く感じ、いろんな可能性を見出すことができた。今回は科学コミュニケーションという技術をイベントに利用したが、イベントだけではなく、例えば授業やグループワーク、会議、会話などでも有効に活用することができるかもしれない。ただ、科学コミュニケーションという技術はまだあまり知られていないので、日本にもっと普及していければ良いと考えている。